鬼想典 ～ Autumn Dream

冥界寺吹雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鬼想典　～　Ａｕｔｕｍｎ　Ｄｒｅａｍ

【Ｎコード】
Ｎ１９７５Ｈ

【作者名】
冥界寺吹雪

【あらすじ】
萃香がまだ人間界にいた頃のお話。少し暗い内容かもしれないので苦手な方はご注意を、です。

序幕

昼下がり。神社の境内の宴会は定例通り開催され、人妖問わずに賑わいを見せる。

人間を取って食ったりする妖怪は殆どいない、いても生まれて間もない知能の低い妖怪と言ったところ。
何百年、何千年も生きている大妖怪ともなれば人間を襲うこと自体はしても、殺すような真似は決してしない。『この世界』で数限られた人間を次々と殺してしまえば、やがて人間がいなくなってしまうことを妖怪達は知っているのだ。そんなこともあって、本来妖怪を打ち払うはずの神社では人間と妖怪が奇妙なことに共存関係にあるのだ。それに人間は酒とつまみを提供してくれるし、大事にしなければいけない。

「萃香ー。あんまり食べると後で代金徴収するわよー」

私の名前をごく自然に呼ぶのがこの神社の巫女、霊夢。人間とは思えない反則級な怪人ぶりを見せてくれることで、妖怪達の間で知らないものは少ない。強いが故に強い妖怪が興味を示す。そして、彼女のもとへ自然に集まるようになる。それが彼女の魅力であり、また彼女自身の悩みだという。滑稽なことだ。

「萃香、聞いてるの？酒は無限でも食料は限りあるのよ？」
「そんな堅いこと言わないでさ、折角の酒がまずくなるよー」
「つまみが無くなる方がよっぽどまずくなると思うけど？」

私は霊夢のことが好きだ。無論、友人としてである。数多くの妖怪がきっとそういった感情を抱いているに違いない、私もその数多くの妖怪の一部に過ぎないというわけだ。だけど、その感情自体が愚かなことだと気付いている者は、私を含めて数えるほどもいないのではないだろうか。

「・・・ねぇ、霊夢」

霊夢は静かに髪をかきあげて、私をまじまじと見つめている。

「何よ、変な顔して」

人間、妖怪。両者は似て非なるもの。力だとか、風貌だとか、そういったこと以上に圧倒的に二つを分かつものを私は知っている。それは決して、どんな大妖怪と人間の間でも越えられることのできない理不尽な壁であり、どれだけ築き上げても必ず破壊してしまう刃であった。

「ちょっとー、聞いてるの萃香？」

「あ、うん。つまみちょうだーい」
「・・・聞いてないわね」

時代に合わせて、妖怪達はその姿を次から次へと変えていく。今の姿は、きっとどこかで人間と未来永劫共存出来るという根拠もない確信めいたものによっているに違いない。
・・・と、どれだけの妖怪達がそう考えているだろうか。この先永遠に人間と妖怪は共存していくことなど、果たして可能なのだろうか。ましてや、たった一人の人間と一生を共にするなど・・・。

「どうしたの萃香。さっきから変よ？」
「・・・いや、ちょっと昔のことを思い出してね」
「なに、萃香が感傷に浸ってるの？それは珍しいわねー、悪酔いでもしたの？」

悪戯っぽい笑顔で、霊夢は私を気遣った。素直に心配を表に表さないけど、心中では人並み以上に人を気遣っているのが彼女の良さだ。

「何よ、にやにやしたりして。・・・でも、あんたがあんな顔する話、ちょっと興味あるわね」
「・・・もう、百年近くも前の話になるかな」

そうして酒を一杯煽って、私はそれを語ることにした。

人は鬼を喰うか

人間は科学の力を持ってして大地の争奪合戦を勝利に収めることができた。

古来より神が支配していた大地は、やがて神が信仰を失うと共にその権利を地上に住む者達に託された。以来、大地は長い間力を持った者（人間、妖怪を問わず）が大地を細かに分断し、個別に統治するという合理的かつ公平な形式が成り立つこととなった。いわゆる『国』の始まりである。

当時の人間は妖怪に食われる存在であり、また妖怪を退治する存在であった。一見危うい関係に見えるかも知れないが、そうして人間と妖怪は互いの数を均衡に保とうとしていたのである。だから戦争だの大量殺戮だの、そういった狂気じみたことは一切起こることはなかったのだ。

事態は近代に近づくにつれて大きく転換することになる。
次第に技術を発展させていく人間はやがて大地の大半を、技術力を剣として支配し、決して荒らされることのなかった妖怪固有の土地すら奪うことを始めた。始めは互いに衝突もあったが、更なる近代化に伴って人間は妖怪の存在そのものを否定するようになっていく。更には『科学』という言葉が定着するや否や、妖怪達は人間の前から姿を消してしまったのである。人間に認識されなくなった妖怪は、もはやこの世界には不要な存在なのだ。

それでもなお人間界から離れようとしない私を、去って行く妖怪達は皆愚か者と言う。呆れたものだ、本来あるべき場所に残ることの何が愚かなものか。人間から認識されなくなった今も、私はこうして人間界で生きることができる。それをせず、古来より住み親しんだ土地を捨てて姿をくらますほうがよほど愚かな行為ではないか。

・・・しかし、時代は移り変わった。今や妖怪に出会うことは皆無と言ってもいいだろう。どんなに人間界に留まることを望んでも、人間からの信仰を完全に失ってしまえば消えざるを得ない。それは以前にも神が辿った道であり、抗おうにも避けることのできない運命なのである。

科学の支配する今日、私は古くから大地を見下ろす大木の枝に座り込みながら、また同じように地上を眺めるのが日課となっていた。この大木を昔の人間は鬼が住む木、

「鬼住木」などと呼んで恐れていたものだが、今となってはその名前だけが残るばかりで鬼の存在に恐怖する者などいなくなってしまった。もう私は人間に認識されることはないのだと思う度にきりきりと心が絞まる思いになる。それでもこの大木だけは、私と共に数百年の時を生き続けて私の足を、いや、もっと色んなものまで支え続けてくれているのだ。もしこの大木に意思があるのなら、きっと私が離れてしまったら淋しかろう。

そうやって幹を撫でてやると、それに呼応するかのようにもっさりと葉を蓄えた枝をわさわさと揺らしてくれる。いよいよ私と通じ合えるのは、こいつだけになったんだな、なんて溜め息の一つでもついてみたその時だった。

「そこの君ー！浮かない顔で何してるのー？」

これをまさしく不意打ちと言うんだろう、真下から聞こえてくるその声はまるで私を呼んでいるかのような言葉を紡いでいた。でもすぐにそれが有り得ない考えと気付き、冷静に下を見下ろす。

「なーにーひなたぼっこー？そんなところで危なくないのー？」

それはもう目を見開いたどころか、口までぽっかり開きっぱなしになるところだったとも。地上にいたのは容姿だけでみると十代前半で、水色のワンピースを纏った清楚な感じの少女。それがあろうことか、少女は私を見上げているどころか声までかけてきている。今の人間は皆私を認識できないだろうというのが私の見解だが驚いた、未だにこんな人間もいるのだな。

「ああ、私はいつもここにいる。ここに住んでいるんだ」

私が答えると少女は不思議そうな表情を浮かべて私を見つめる。そりゃ、普通人間は木の上に住まないからな。

「んーまあどうだいそこの嬢ちゃん、ここで会ったも何かの縁だ、一つ私と話していかないかね？」

そう問いたのも単なる気まぐれに過ぎなかった。良識ある人間ならば、枝の上に住み着くと自称するいかにも怪しい格好（鬼古来の服装ではあるが、現代の人間からすればそう見えるだろう）の人なんか相手にしたくはないのが筋である。ただ、私を認識できる人間ならもしかしたら、なんて思ったのであった。

「お話？なになにー？」

驚く程すんなりと少女は私の誘いを受け入れた。あの年頃は何でも受動的になる時期ではあるが、警戒心というものは芽生えないのかね全く。自分から聞いておきながらそんなことを思いつつ、久方ぶりに地面へ跳び降りることにした。

「うわ、すごーい！あんな高いところから跳んで大丈夫なの？」

「そりゃ大丈夫さ。私はあんたら人間みたいにやわじゃないからね」

「人間みたいに・・・？それじゃー君は一体？」

どうやら私が鬼と確信していた訳ではないらしい。

「私は鬼、伊吹萃香」

自分の名を口にするのは随分と久しぶりな気がする。

「鬼？・・・本当？本当に鬼なの！？」

大好物を目の前にした子供のように目をきらきらさせるその姿、それが私を前にしたリアクションとは・・・。今の人間は鬼を怖がらないのだな。

「鬼は人間を襲い、とって食う種族だ。だから、私はお前をさらう悪者だ」

軽い脅しをけしかけてみたところ、少女は表情一つ崩さず

「うそー。だって君、お話しようって言ったもん」
「あんたを食べる為に油断させたとしたら？」
「だったら食べちゃうまで教えないでしょー？」

くく、と思わず喉が鳴った。どうやらこの少女、頭が空っぽという訳ではなさそうだ。

「それに、こんなに可愛い悪者なんていないよー」
「か、可愛い！？」

人間に恐れられるどころか、可愛いだなんて。人間どころか同じ妖怪にもそんなことは言われたことないのに・・・。

「赤くなってるー！やっぱり可愛い～！！」

なんて周りの目も気にせず声をあげると、私に向かって襲い掛かってきた！普段ならこんなもの避けるのは訳無いが、さっきので面食らって軽くスタン状態の私にそれを避ける術はなかった。

「な、何をする！？こう見えても私は人間を何人も食ってきた怪物でだな・・・」
「わー、二本の角がおちゃめーっ！手入れとかどうしてるの？それにこの服もほしー！なんか派手過ぎずほのかに魅せてる感じがたまらないー！」
「だーもう変なところ触るなー！離してくれーっ！！」

その後、少女の手荒い抱擁が延々と続いた・・・。

「私は秋(あき)。へへへー、よろしくね萃香！」

意外にも律儀に頭を下げてあいさつをしてくる。最近の子供はあいさつが出来ないとよく言われるが、その点秋は出来た娘なのかもしれない。・・・まぁ、あの抱擁さえなければ。

「でも、何で萃香はこんな木の上に住んでるの？鬼っていうくらいだから、てっきりおっきなお城とか、島とかに住んでると思ってたよ」

「そうだな、城に住んだことも、島に住んだこともあった。だけどそれは遠い昔の話、今や鬼は忘れられ、住み処も全て奪われた。人間様に完敗さ」

途端に秋は顔を俯けた。喜怒哀楽のわかりやすいやつだ。

「でも、私は人間を恨んでなんかいない。いつでもこの世界では古い者は消えていく運命なんだ。だから私も、きっともうじき消えていくんだろうな」

「嫌だよ！そんなの・・・だって、まだ出会ったばっかりだよ？せっかく、お友達になれると思ったのに、そんなの・・・」

友達、か。私には縁の無かった言葉だな。だが、そういうのは嫌い

じゃない。

「人間の信仰がある限り私は消えないよ。全世界の人間が、鬼という存在そのものを忘れてしまわない限りはな」

「じゃあ、またここに来れば会える？」

「ああ、会えるとも」

それを聞いた途端秋は私に猛突進。今度は初撃こそ避けたが素早い方向転換から繰り出される二撃目に完全に不意をつかれる羽目になってしまった。

「わーい！じゃあ今日から私達は友達だよー！今日はもう帰らなくちゃいけないけど、明日また遊ぼうね！」

「だーっ！分かったからひっつくなー！」

よもや人間にここまで振り回されることになるとは、なんとも情けない・・・。

「ばいばーい、また明日ー！」

と手をせっせと振りながら秋はコンクリート舗装された道を軽快な足どりで帰っていった。するとまるで嵐の後のような静けさの訪れ

とともに、私一人の空間が帰ってくる。

「なぁ、大木よ。どうやら私もまだこの世界に留まる権利があるようだ」

風もないのに大木はゆったりと枝を揺らし、眩しい日差しを遮ってくれる。

「鬼の威厳はもはや地に墜ちた。だが、それでもなおこの世界は私を受け入れるらしい。・・・惨めなものだ、はは。お前は私を笑うか？」

自嘲気味に笑って見せた。だが、大木はただ悲しげにそこにあるのみだった。私は木相手に何を言っているんだろうか、とことん情けない。昔の鬼達が今の私を見たら笑うだろうな。

一人、人が通り過ぎる。私のことなど気にもかけず、ただ平然と。

もし私があいつを襲ったら、威厳がでるのではないか。・・・いや、きっと今の時世じゃただの事故として処理されるに違いない。

「秋、か」

今夜、その名前が私の頭から離れることはなかった。

鬼は人を喰うか

秋が私の元に訪れるようになって早一週間、毎日昼下がりになるとひょっこりと顔を出し、初対面の時と同じ破天荒な振る舞いを見せては嵐のように去っていく。変わった人間というのがこの時の印象だった。

「萃香・・・いる？」

その日もまたいつもの通り私の前に現れる秋は、危うく聞き落としてしまうほどの声量だった。眼下で立つのは私をその細い目で見つめる秋の姿。今日は白いワンピースで、その長い黒髪を束ねることなくだらりと腰にかかるまで伸ばしている。女である私から見てもその容姿はかわいいと言うに値するものだった。

「・・・」

私は何も言わずに枝を下りた。厚い雲が太陽を覆い隠し、多少肌寒い。

「あのね、私、聞いちゃったんだ」

少なくともいい予感はしなかった。そしてその予感は、想像を遥かに超えてしまった形で伝えられる。

「このおっきい木、もうすぐ切られちゃうんだって」

何を言っているのか、理解にはかなりの時間を要した。この鬼住木が切られる？それは一体なんの冗談だ？

危うくそれが言葉になりかけ、喉の一歩手前で辛うじておしとめる。秋は、好きで事実を告げてきたのではない。考えるまでもないな、私が長きを共にした大木が人間の手によって切られるのだ、私にとってそれがいかに酷なことか、それは私を除けば秋が一番よく知っているはずなのだ。

「・・・そうか」

だから、私の声は落胆の色に染まっていた。

「やっぱり、悲しそうな顔してる。こんなこと、いいはずないよ！」

感情をそのまま声にしているようだった。似合わぬ荒々しい口調で、胸に腕を引き寄せながらそう私に訴えかけてきた。

「もし私がこの鬼住木を守る方法が存在するなら、それは人を殺す他ない。ははは、何と愚かな選択だろうか」

強い、台風のような風が吹き抜けるが、ふわりと浮かぶワンピースを押さえようともせずに

「でも、そんなのって・・・」

いらなくなれば切り捨てられる、この世界はいつもそのルールに従って回っている。良かれあしかれそのルールは世界をより安定に保つ為の手段なのだからその存在は当然必要なものだと考えていた。それがどうだ、いざ自分らが世界ののけ者にされようとなった途端に世界のシステムそのものが恨めしい。

「なぁ、大木よ」

紡ぐ唇がいつの間にか乾いて少し痛い。

「お前まで、いなくなってしまうのか？」

こんなにも風が強いのに、鬼住木は静かに葉を擦らせるのみだった。

滝壺にでもいるかのような豪雨の昼下がり、あまりにも突然のことに私はぼうと座ったまま動けないでいた。しかしてすぐに平静を取り戻した私は枝を下り、その忌ま忌ましい重機達に鋭く憎悪にも近い視線を突き刺すが、やはり彼らに私が認識されることはなかった。巨大な回転刃が雨に濡れて鈍い光の乱反射を起こしている。後方に

は先端に特大のフックを有した長い棒状の装置を持つ車両、一体何に使うのだろうか。

「雨も強い、さっさと終わらせて引き上げるぞ」

誰かが言った。終わらせる？それは長い鬼住木の一生に対しての言葉か？あいつら人間よりも遥かに生きたこの大木に、手向けの一つもないのか？理不尽だ。あまりに・・・愚かだ！

「待って！！」

それは、作業を始めようとする男達に加えて私にも向けられた言葉だったのかもしれない。頭に上った血が、緩やかに引いていくのが感じられる。

「この木を、切らないで！」

その場の全員の視線が、傘もささずに白のワンピースを満遍なく濡らした秋の姿にくぎづけになった。息を切らせ、その幼い顔を伝う水滴もお構いなしに、全身の力を振り絞って叫ぶその姿は私の目に影法師のように焼き付いてきた。

「お嬢ちゃん、傘もささないで風邪ひいたら大変だよ？これ貸してやるから、早く帰んな」

「この木は・・・私と私の大切な人の大好きな木なの！だから・・・」

雨は私をも襲う。おかげで顔もずぶ濡れだが、雨以外の何かが私の頬を伝っているような気がした。

「私達の大切なものを奪わないで！」

悲痛ともとれる叫び。それがあまりに痛々しくて、思わず目を覆いたくなるほどだった。けれども秋は訴え続ける、叶う願いだと信じて、ひたすらに。
願いだけでは止められないことがあるのを、彼女はまだ知らないのかもしれない・・・。だとしたら、なんと残酷なことだろう。世の不条理をこんなにも幼くして痛感させられ、この大木は切られる。

「お願い・・・やめて・・・・」

私に通う血がぐんと熱くなって、心臓がはちきれそうになった。悲しい思いをするのは私だけでいいはずなのに、悲痛な叫びをあげるのはこの大木だけでいいはずなのに。

回転刃が回り始めた。一歩一歩、大木の死を意味する音と共にその凶器は近付いてくる。両手を目一杯に広げ、それを阻止しようと立ちはだかる秋を、雨は容赦なく叩き伏せようとする。

「い、いや！！離してよ！」

別の男がそれを取り押さえた。開放されようと必死で暴れ回るが、それにしては幼い秋の力はあまりに非力だ。もう、これっぽっちも

動けない程拘束されてしまった。

「だめ・・・嫌だぁ！！」

殆ど記憶はない。
ただ、頭のネジの一本でもはずれてしまったのだろうか、怒りや狂気といった感情が液体のようにとめどなく溢れ出たことだけは覚えていた。鬼住木のもとに立ち尽くし目にうつるのは、眼前に散らばる無数の残骸と一人の少女の立ち尽くす姿だけ。それが何を意味しているのか理解するのはたわいもないことだが、受け入れるのには時間が必要だった。

「あ・・・萃、香？」

ぼんやりと私を見つめ、地面を見回し、再び私を見た秋はあまりにか弱く喉を震わした。辛うじて私の耳に届くその声は、一時停止した私の思考を一瞬にして蘇らせる。

「これは、私がやったのか」

錆びた血の臭いが雨にも関わらず付近に充満している。まるで地獄絵図。昔、鬼の人間狩りが終わった現場も、確かこんな感じだったな。

「・・・」

秋は答えなかった。私になんと言葉をかけようか、探っているようにも見えた。

「本来妖怪は、人間を殺すことを生業としている。だからこれは当然の行為のはずだよな？・・・だが、何故だろう」

冷たい雨粒が容赦なく露出した腕をたたき付け、その感情はより一層深いものになっていた。

「胸が、痛い」

嫌な吐き気がする。むせぶような濃い血の臭いのせいだろうか、はたまた別の理由があるのだろうか、分からない。ただ、息も絶え絶え静かに全身の力が抜けていくのだけは分かった。

「萃香！？どうしたの、返事してよ、萃香！！」

雨に濁された大地に身を預けると、今度は背中を雨が打ち付ける。
重い瞼を開けると歪んだ秋の顔が映し出され、そして。

「ねぇ、起きてってば！・・・・萃香ぁ！」

次に目を閉じた時には何も聞こえなかった。

――人間を殺すことは罪なのか？

遠い昔、私達妖怪が人間世界で意気揚々と蔓延っていた時代。私には人間に友人がいなかった。だから、何が正しくて何が間違いなのか、正してくれる者もいなかった。

――人間を殺すことは罪なのか？

人を殺すのは簡単だ。片腕さえあれば大抵の人間は私の力の前に沈黙していった。

――人間を殺すことは罪なのか？

人間を殺す行為はたやすいものだ。風呂に入るとか、食事をするだとか、そういった日常的に行われることと大差ないことだった。

――人間を殺すのは罪なのか？

「木を殺すのは、罪じゃないのかな？」

不意に聴覚を秋が支配し、私は目を覚ました。

「このおっきな木かさっきの人たち、どっちかが死ななくちゃいけなかったとしたら・・・どっちが死ぬべきだったのかな？」

どっちが死ぬべき？・・・愚問だな。

「誰も死ぬはずはなかった。例えこいつが切られても、こいつにはまだ木材として生き続ける道があったからな。それがどうだ、人間ときたら一度死んでしまえば永久に世界から追放され、忘れられる」

ただ、私が大木と離れたくなかっただけ。こいつまでいなくなったら、私は何の元に生きればいいのか見失ってしまうから、だからなのだろう。

こんなにも、愚かな行為を為したのは。

「それにしても秋は強いんだな。これだけの人間が目の前で殺されていながら、平然としている」

「私ね、なんか変なの。萃香が工事のおじさん達に・・・すごいことしたときね、ちょっとだけスーって心が晴れた気がするの。人が死んじゃったっていうのに、やっぱり変かな？」

改めて、胸が痛む。そんな感情は十いくつの幼い子供にさせるべきではないのに、私は何を考えていたのだろうか！

「変だな」

はっきりと言ってやった。

「・・・でも、それはお前もこの鬼住木の伐採を厭いてくれた証拠だな」

多分、鬼住木も同じ気持ちだろう。

「ありがとう」

言ってる自分が可笑しく思えた。何に対して私は礼を言ったんだろう、鬼住木を切らせまいと勇敢に男達の前に立ち塞がったことか？それとも人間を殺した私を責めないことに対してか？

いずれにしても、礼を言わずにはいられなかったのは事実だが。

「ありがとうだなんて変なのー。助けてくれたのは萃香の方だよ？私こそありがとーだよー」

「助けたって・・・、いや、そりゃあ結果的にはそういう形になったのかもしれないが・・・」

「じゃーそれでいいじゃん。いつまでもくよくよしてるなんて萃香らしくないよー」

私らしくない、か。・・・確かにそうかもな。

「でも、この惨状はどうにかせんとな・・・」

私を取り巻く憂いはきれいさっぱりふっ切れた訳だが、目の前に広がる元人間の処理を考えるとまた別の憂いに纏われるのだった。

「ふー、なんとか大事になるまえに片付いたな」

一息ついているところに秋の腕が首に巻き付いてきた。

「お疲れー！穴掘りしてる間に雨もあがってよかったね」

土砂のように降り続いていた雨は漸く降り止んだようで、雲間からはこっそりと太陽が顔を覗かせていた。

死体は人間がする供養を真似て、地面に埋めることにした。この大木が生きながらえる為の犠牲になったのだ、せめてもの報いというやつである。道に付着した血液も表面の土ごと一緒に埋めてやった。これで死体が発見されることもないだろう。

「ほらほら、いつまでもそんな顔してないで遊ぼうよー！」

「・・・ん、ああ。まだ浮かない顔をしていたか」
「気付いてなかったの？えへへー、じゃあ私が元気にしてあげる！こちょこちょー」
「元気にってちょっ？脇腹は、ひひ！脇腹は駄目だって！！」

くすぐり攻撃は私が最も苦手としている攻撃なわけだが、それを的確に突いてくる秋の魔の手から逃れる術はやっぱりなかったのだった・・・。

草木も寝静まった夜、星の光で微かに照らされる大木に腰掛けながら天を仰いだ。そこに写し出された光景はいつものそれと全く変わらないはずだが、それを確かめる術を私は持っていない。不変の事実を確証付ける程難しいことはないが、それでも現代の科学をもってすれば可能なことであろう。人間は、どんなに難儀な事もたちまち解決してしまうのである。

天は全てを知る。例え人が見ていなくても天だけは全てを見通している。だから隠し事はいずればれてしまうという古くからの戒めのような言葉である。

真実とは常に一つでなければならないのだ。私が知る限りでは、それは紛れも無い事実であった。だから、きっとこれからもそれは真実として世界の法則の一ページに記され続けることとなるだろう。

だが、その時の私はまだ知らなかったのである。
真実は、時に捩曲げられて伝わることもあるということを。

「綺麗な星空だ」

何に言うでもなく唇を動かした私を、一陣の風が優しく撫でていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1975h/

鬼想典 〜 Autumn Dream

2010年10月28日00時50分発行